

---

# コナンと哀の漂流記

白波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ナンと哀の漂流記

### 【ZPDF】

Z0664Y

### 【作者名】

白波

### 【あらすじ】

蘭が当てた福引のチケットを使ってとあるツアーハンと乗った。しかしツアーハンの乗った船で起きた事件を調べているときに何者かに海へ落とされてしまう。そして、目が覚めるとなおと共に無人島に流れ着いていた。

## プロローグ

小五郎と蘭、コナン、哀、平次、和葉は蘭が商店街の福引で当たったチケットで豪華客船に乗つていたが同じツアーに参加していた霧待小枝子さんが殺害されるという事件が起き小五郎とコナン、哀、平次はそれぞれ事件について調べ始めた。

105号室

「灰原…霧待さんやほかのツアー参加者について何かわかつたか?」とコナンが聞くと哀は

「そうね…私が調べた限りだと、霧待さんの事はわからないけど…ツアー参加者の船亀陸斗についてならインターネットで検索したら出てきたわ…。」

と言つた。

「それで…船亀さんってのはどんな人なんだ?」

とコナンが聞くと哀は

「船亀さんはサバイバルチームのゲームのチームのリーダーのようね…あなたの方は何かつかめたの?」

と言つた。

「ああ…今回のツアー参加者で小枝子さんが亡くなつたとみられる時間にアリバイがないのは船亀陸斗さん、空梨恵理子さん、やと陸川隼人さんの三人…だが気になるのは小枝子さんが残した…」

とコナンが言つと

「血で書かれた鉛の文字とカタカナのクやろ…。」

と言ひながら平次が入つてきた。コナンが

「ああ…。」

と答えると少し考えてから

「そつか!」

といい部屋を飛び出した。それを

「ちょっと！江戸川君！時計型麻酔銃忘れてるわよー。」  
と言いながら哀が追いかける。

「工藤！俺をおいてくな！」

と平次が言つたが二人はすでにどこかへ行つていた。

## 208号室

「コナンは床にある文字を見ると  
「やっぱりそういうことか…。」  
とつぶやいた。すると  
「まつたく…相変わらず氣に入らないわね…自分だけ真相がわかつ  
た時に顔…。」  
と言いながら哀がやつてきた。  
「わーたよー話すから…一旦甲板に出よ!…。」  
と「コナンが言つと二人は甲板に向かつた。

## 甲板

「それで…誰が犯人なの？」  
と哀が聞くと「コナンは  
「まずは床に書いてあつた…」  
と説明を始めるが突然後ろから何者かに口をふさがれた。「コナンと  
哀は手から逃れようと抵抗するがその人物は軽々と二人を持ち上げ  
海に落とした。

## プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからよろしくお願いします。

## 第1話 助かつたはいいけど……

「君……君……江戸川君……」

と言つ声でコナンは目を覚ますと哀の顔が視界に入った。

「……」

とコナンが聞くと哀は

「わからないわ……どこかの砂浜だつてことは確かだけど……」

と答えた。

「なるほど……あの後海流がなんかに流されてこの砂浜に流れ着いて助かつたってわけか……」

とコナンが言つと哀は

「そうね……でもそう喜んではいられないんじやない？」

と言つた。

「どういづ……」

と言つながらコナンが後ろを見るといつそうとした森が視界に入つた。

「あんまり長い時間海にいたら溺死してたどろうから船の航路から察するにここのはどこかの島……今の所は人の手が入つている形跡は見当たらないわ……」

と哀が言つとコナンは

「無人島つてわけか……」

と言つた。すると哀は

「まだそつと決まつたわけじゃないわ……島を回れば集落の一つや二つぐらいあるだろうし仮になかったとしてもまたたく船が通らないなんてことないと思うわ……」

と答えた。

「とにかく今日はもう日が傾いてきてるから何とか寝られる場所さがさねーと……」

とコナンが言つてから歩き出すと哀は

「やつね……」

と答えるコナンの後ろを歩きだした。

南の砂浜 付近

「こここの洞穴なんかいいんじゃねーか……。」

とコナンが言うと哀は

「そうね……雨風もしのげそうだし……でも、ここで一人寝るの?」  
と哀が言った。確かにコナンが見つけた穴は島の真ん中にある山の岩肌に開いた子供一人がやっと入れるような大きさの穴である。  
「しかたねーだろ……もう暗いんだから……あんまり歩き回るとあぶねーし……。」

とコナンが言うが哀は

「あのね……あなたも私も外見はともかく中身は高校生よ……。  
とかなんとかぶつぶつ言いながら結局洞穴に入つている。」

「素直じゃねー奴……。」

とつぶやくとコナンも洞穴に入った。

次の日…

南の砂浜

「やつぱりこの周辺に人の手が入つてる様子はないわね……。」

と言いながら哀が周りを見るとコナンは

「ああ……昨日は暗くてわからなかつたけど……結構広いな……この海岸

…。」

と言った。

「そうね……とにかくここで救助を待つか島に住人がいるのにかける  
か……どうする?江戸川君……。」

と哀が聞くとコナンは

「そうだな……とりあえず海岸を歩いてみて様子を見ようか……。  
と答えて歩き出した。」

1時間後…

「駄目ね…道と並ぶのもが存在しないのかしら…。」

と哀が言つとコナンは

「もうだな…最悪の場合は比較的歩きやすそうなあつちの森を突破するしかなさそうだな…。」

と言いながら向こうに見える森を見た。

「森を突破するつて…結構大変なんじゃない?何がいるかわからな

いし…。」

と哀が言つとコナンは

「いや…どちらにしろ何か食べ物や水がいるから結局森には入らないといつてないからどうせなら集落もないか探せばいいんじやないか?」

とコナンが聞くと哀は

「もうね…。」

と答えて向こうの方へと歩き出した。

## 第1話 助かつたはいいけど…（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

## 第2話 島内探検！（南の海岸・東の森）

南の砂浜 東の森付近

「それにしても…かなつうひやつとした森ね…。」  
と哀がつぶやくと「ナンは

「やつだな…近くに来ると思つたよつもひつやつとしたるな…。」  
と答えた。

「とにかく…入るや…。」

と言つながら「ナンが森に入ると哀はそれに続いた。

東の森

「ねえ…江戸川君、やつきの場所に戻れるわけ？」

と哀が聞くと「ナンは

「そちらくんは大丈夫だと思つた…。」

と「ナンが言つと哀は

「ちょっと一目印もなしに来たわけ！」

と言つた。

「砂をまいても消えるだらうし、この森は洞窟とかと違つて早々迷  
いはしないと思つけど…。」

と「ナンが言つと哀が

「…バカね…それじあ迷子になるに決まつてゐわよ…。」

と半ばあきれ氣味に言つた。すると「ナンは

「冗談だよー石を落してゐからさ…。」

と弁解した。

「まつたく…。」

と哀が言つと一人はまた歩き出した。

東の森 東の平野付近

一人が森の中を歩いていると「ナンが立ち止まつた。

「どうかしたの？江戸川君…。」

と哀が言つとコナンは指を立てて

「なにか聞こえる…。」

と言つた。哀もコナンがやつているように耳を澄ましてみると

「水の音ね…かすかだけど…。」

と言つた。

「いひちの方みたいだな…。」

と言つとコナンは歩き出して哀はそれに続いた。

### 東の泉

「いひだつたのね…。」

と哀が山からの湧水で満たされた小さな泉を見ながら言つた。

「そうみたいだな…これで水の確保はできたな…。」

とコナンが言つと哀は

「まついたなつたら文句は言えないし…。」

と言ひながらあたりを見回して

「でも…水をくむようなものはないわね…。」

と言つた。

「とりあえず場所はこの石をたどつて見つけるとして…水を汲める  
ようなものと食べれそうなものを探すか…」いひで何日頃のことにな  
るかわからぬし…。」

と言つとコナンは再び歩き出した。

「それもそうね…。」

と言つと哀はそれに続いた。

### 東の平野

一人がしづらへ歩くと少し開けた場所に出たそこには建物ひしき  
影が点々と見える。

「あれって集落か何かしら？。」

と哀が言つとコナンは

「行ってみるか…。」  
と言いながら歩き出した。

東の平野 海岸付近

二人は建物があるあたりに来ると周りで人が住んでいそうな建物を探したがどれも廃墟となっていた。

「この島にはかつて人が住んでいたけど今はいないみたいだな…。」  
とコナンが言うと哀は

「あら…まだ島の半分も歩いてないわよ…。」

と言つとコナンは

「確かに…おそらく島の半分も来てないだろうな…。」

と言つた。すると哀は一つの建物に入つて行き

「でもそれほどたつてないみたいよ…使えるものは結構あるわね…。」

」

と言つた。

「それじゃこの建物の中をいろいろとみてみるか…。」

とコナンが言うと二人はあたりを調べ始めた。

## 第2話 島内探検！（南の海岸・東の森）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

前の更新からだいぶ経ってしまいました..。

これからもよろしくお願いします。

### 第3話 島内探検！（東の平野）

「ナンと哀が集落跡をくまなく探した結果。バケツや鍋などある程度使えそうなものが手に入った。

「これで水が汲めそうね…さっきの泉の場所に行きましょ」つか…

と哀が言うと「ナンは

「そうだな…。」

と答えて一人で泉の方へ向かつた。

「ナンがふと空を見上げると今にも雨が降り出しそうな雲が広がっていた。

「ひと雨きそうだな…。」

と「ナンが言うと同様に空を見上げた哀が

「そうね…早く水を汲んで一旦砂浜まで戻りましょう。」

と言しながら歩き出す。

「そうだな…。」

と答えると「ナンもそれに続く。

#### 東の泉

「ナンが先ほどのバケツで水をくくつとまつまつと雨が降つてた。

「降つてきやがった！」

と言うと「ナンと哀は走り出した。

#### 東の森

「ナンと哀は走つてこるときに見つけた雨がしのげそうな木の下で雨宿りをしていた。

「結構降るわね…。」

と哀が言うと「ナンは

「ああ……大丈夫か？灰原……その……服とかずいぶん濡れてるみたいだけど。」

と言った。

「別に大丈夫よ……。」

と哀がそつけなく答えるとコナンは

「そうか……。」

と答えた。

しばらくたつて雨がやむと二人は一旦最初に流れ着いた砂浜に戻つて来るとだいぶ暗くなつており西の方の海に夕日が沈んでいくところだつた。

「つで……これからどうするわけ？」

と哀が聞くとコナンは

「どうするつて……あの様子を見る限りだとこの島には住民がない可能性が高いな……だからなんとかこのあたりを通る船に気づいてもらわないと……。」

と答えた。

「まだ島の半分も言つてないけど……反対側には誰かいるんじゃないのかしら？」

と哀が言つとコナンは

「その可能性は低いよ……あの集落跡地をあちこち見たけど港の跡もあつた……つまりかつてはあの場所がこの島で一番栄えた場所だつたつてわけだ……つまりあの場所に人がいなつてことはこの島は完全な無人島である可能性がかなり高いとみて間違いない……だったらこの周辺の海域を通る船に気づいてもらえるよつに火をたいたりして目印を出すのか……もう少し島を探索するか……。」

とコナンが言つと哀は

「でも……どちらにしろまともな食べ物を見つけないと……そのために明日はもう少し島を探索した方がいいと思うけど……。」

と言つた。

「やうだな…。」

と答えるとコナンは砂浜に座つて会話している間に暗くなつて出てきた星を哀と共に眺めていた。

その頃…

コナンたちが乗つっていた船はあの後予定通りに港に着いた。船が港に着いた後平次が事件を無事解決して蘭たちはツアーをそこで抜けた。海上保安庁などが探ししているがコナンと哀が見つかったという連絡は来ない。

「コナン君…哀ちゃん…。」

と海沿いのベンチに座つている蘭がつぶやくと小五郎がやつてきて「大丈夫に決まってるだろ…あいは結構しぶといから…きっと生きてるよ…。」

と答える蘭の横に座つた。

「そうだよね…生きてるよね…一人とも…。」

と言つと蘭は立ち上がり

「少し散歩してくる…。」

と言つて海岸沿いの遊歩道を歩き出した。

### 第3話 島内探検！（東の平野）（後編）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第4話 島内探検！（北の岬）

日が昇るとコナンと哀は東の平野を通りぬけ北の方へ向かつた。

「意外と大きいわね…」の島…。」

と哀が言つとコナンは

「確かにな…。」

と答えるながら歩き続ける。

### 北の岬

一人がじばらへ歩くと岬の先に着いたようで前から海面が迫つてくる。

「じゅりゅの岬はここまでのよつね…。」

と哀が言つとコナンは横を見ながら

「そうだったみたいだな…。」

と答えた。一人は少し歩き適當なところに腰かけた。

「それにしても無人島にしては歩きやすいわね…。」

と哀が足元を見ながら言つとコナンは

「そういうやうだな…たぶんかつて住んでいた人たちが出て行つてからあまり経つていらないんだろうな…。」

と答えた。

それからじばらへ岬の先から海眺めていた。そこから遠くの方まで見渡せたが島影はおろか船の姿すら見えず水平線が広がつていた。

「じゅりゅまで見る限つ」は絶海の孤島か…。」

とコナンが言つと哀は

「やうね…まだ西の方を見てないけど」の調子だとこは大海原にぽつんと浮かんでいる島のよつね…。」

と言つた。

「やうだとすると船が通るのを待つしかないけれど……。」「どうやら船もあまり通らないようね……。」

と言つよつな会話をしながら海を眺めているが船は一向に通らない。「別の場所行つてみるか……もしかしたら西の方には何かあるかもしれないし……。」

と言いながらコナンが立ち上がると哀は

「やうね……。」

と言つて立ち上がつた。

「コナンと哀が一人で元来た道を戻つてこると哀が

「それで……これからどうするわけ?」

と聞いた。

「どうするつて?」

とコナンが聞き返すと哀は

「西の方に行つてみるかどうかよ……。」

と言つた。するとコナンは

「もちろん行つてみるさ……それでも人が住んでいなかつたらいいから辺を通る船に気づいてもらはうしかないな……。」

と言つた。

「でもここまで見る限りじゃ船はまったく通つてないわよ……。」

と哀が言つとコナンは

「そりなんだよな……俺たちが乗つていた船が近くを通りてるはずだから來てもおかしくないとと思うんだけど……。」

と言つた。

「とにかく……あつちの森の方行つてみましょつか……。」

と哀が言つとコナンは

「ああ……。」

と答えて歩き出した。

「ねえ…江戸川君…。」

と哀が話しかけると「ナンは

「なんだ?」

と言つた。

「こま〜りじいじーと聞くのせどいつかと懲りたさ…正直じつ懲り

てるの?」

と哀が言つと「ナンは

「どう思つてゐつて?」

と聞いた。

「私のこと…やつぱり恨んでたりするのかしら?」

と哀が聞くと「ナンは

「…別にそんな事ねーよ…確かに体が幼児化したときはおどろいた

し自分の体をこんなにしたやつを恨んだよ…。」

と言つと一回言葉を切り

「でもな…これはこれでよかつたんぢやないかつて思つんだ…だつてあのまま一藤新一だつたら気づかないことだつていつぱいあつただらうし江戸川「ナンだからこその繋がりもできたしな…。」

と言つた。

「やつ…。」

と哀が言つと一人はふたたび無言で歩いて行つた。

## 第4話 島内探検！（北の島）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

「ナランと哀は西の森の方へ行つたが気がつつそうと生ご茂つておりあまり深く進んでしまつと森から抜けなくなる可能性が高いと考えたので東の平野の集落跡のあたりまで引き返した。

「そろそろ遅くなつてましたし……このへんで寝るか?」

と「ナランが聞くと哀は

「…もうね…。」

と答える。

とつあえずそのままのつぱりで寝るわけにもいかないので家の跡地の中で一番雨風がしのげそうな場所のところに行き一人で横になつた。こじはレンガで作られた壁が少し残つており屋根こそないが周りのといりよりかはましだつた。あおむけに寝ると夜空にはまるで宝石をちりばめたよつた星空が広がつてゐる。

「きれいね…。」

と哀が言つと「ナランは

「確かに…東京じゃこんな星空見れないな…。」

と答える。

「ほんときれいね…お星さまの国みたい…。」

と哀が言つと「ナランは

「お前でもそんなこと言つんだな…。」

と感心したよつて言つた。

「悪かったわね…。」

と哀が言つと「ナランは

「もう怒るなよ…。」

となだめる。それからしばりくの間星を眺めていたが

「でも…そんなこと言つていたいれるのはこつまでかしら…。」

と言ひながら少し暗い顔をして哀は体を起こす。

「どうするもこうするも…助けを待つしかねーだろ…。」

とコナンが答えると哀は

「もうはいっても…この島に流れ着いてもううつ口よ…何か食料を見つけないと…水だけじゃ体が持たないわ…それに…西の森は入っていないとはいえあの状況だと民家もなさそうだからこの島はほぼ確実に無人島…つまり島にいる人に助けを求めるのは不可能…だつたら近くを通る船に気づいてもらうしかないけど…。」

と言つた。するとコナンも起き上がり

「確かに…こうなったからには自力で食料を何とかしなきゃいけないし民家を探すよりも船に気づいてもらつようになきゃいけない…とは言つても今日はもう遅いからもう寝て明日作戦を考えようぜ…。」

と言ひふたたび横になつた。

「…そうね…。」

と言つと哀も同様に横になる。

「…。」

哀が目を覚ますとあたりはまだ暗かつた。

「まだ朝じゃないのかしら…。」

と言いながら周りを見るが時計がないため確認のしようがない。

「まあいいわ…。」

と言い体を起こすと周りは暗いが横でいまだ寝ているコナンが視界に入った。

「まったく…なんだかんだ言つて平和そうな顔して寝てるわね…状況分かってるのかしら…。」

と言つた。立ち上がり少しつくと水平線の向こうから朝日が昇つてくる。

「…まさかこんな時間に目が覚めるなんてね…。」

哀が朝日を眺めながらつぶやくと後から

「お前がこんな時間に起きることがあるんだな…。」

と言ひ声がした。

「あら…江戸川君…起きてたの?」

と哀が聞くとコナンは

「まあな…。」

と答える。

それから少しの間一人は日が昇り明るくなる様子を眺めていた。

## 第5話 星空の上で（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0664y/>

コナンと哀の漂流記

2012年1月10日22時46分発行